



## 激動期の印刷界を顧みて

# 『激 動』

### (1) 買えない経験

史談会開催日

昭和42年(1967年) 6月22日

#### ■ 語る人

佐久間 長吉郎 氏  
(中央社会長)

#### ■ 【佐久間 長吉郎氏略歴】・

・ 明治26年3月東京に生れる。大正6年東京帝国大学法科大学経済科を卒業後、久原商業の横浜出張所長、青島支店長などを歴任。大正10年秀英舎支配人に就任。昭和6年秀英舎常務取締役役に就任。昭和10年大日本印刷常務取締役。昭和18年大日本印刷取締役社長に就任。この後山陽パルプ監査役、神崎製紙顧問、中央社取締役社長、中央通運相談役等に就任。昭和30年大日本印刷取締役会長就任。昭和34年大日本図書取締役会長、同38年中央社取締役会長に就任し現在に至る。

#### 【公職・団体歴】

・ 昭和18年日本印刷文化協会常務理事、印刷同友会顧問、昭和19年日本印刷産業綜合統制組合理事長。昭和21年日本印刷学会理事。昭和22年印刷図書館監事。昭和27年印刷事典編集刊行会会長。日本印刷工業会会長。昭和32年日本出版取次協会会長。教科書協会会長。昭和38年印刷図書館顧問。

#### 【受賞】

・ 昭和25年内閣より緑綬褒章を授与。昭和34年日本印刷工業会から印刷文化賞を授賞。昭和41年内閣より勲二等瑞宝章を授章

私が秀英舎（大日本）に関係したのは、はじめ大正5年の頃から2年ばかりで、その後途中で一時辞めて、昭和6年にまた戻ってきました。昭和6年には常務取締役として秀英舎に来たわけです。お話の根幹は昭和の初めぐらいからの事にしたいと思います。

大変不景気な時期で、日本の財界全体が衰退しきっていました。昭和になっても、印刷界の現状は明治の時代とあまり違ってないように思っておりました。明治の末期になって共同印刷や凸版印刷が出来てまいりまして、財界全体から見れば小資本ですが、やや資本主義的経営が行われるようになったものの、多くの印刷所は家内工業的なものでそれが非常に多かった。そういう状況は昭和の初めになっても依然として続いていたわけです。

不景気になって対策をすと言っても、小さなところがたくさんあるものですから、政策でどうこうするという事は出来ませんでした。ただ秀英舎、共同、日清、凸版の4社がビッグ・フォーをもって毎月1回会合して、商売の話をしていたんです。商売の話といっても内実の競争は激しかったんですから、おざなりの話で、協定を結んでどうこうするという考えは当時はまだなかったんです。

そのころ、共同印刷、秀英舎が大きくて、凸版はその次くらいでした。凸版は昭和の中期に戦争になってから、井上さんの経営がうまくて、第一流に伸びたということであって昭和の初期はそれほどでもなかったんです。話が逸れますが、私が秀英舎から離れていた時分の大正14年ですか、日本の労働運動史上に残る大ストがあったんですが、後から考えて、私はあの時秀英舎にいればよかったなと思ったんです。ああ言う経験は買おうと思っても買える経験ではないんですから。

その当時、労働運動の知識が無いところにもってきて、急に労働

争議が起こったものですから、経営者は大分戸惑ったようです。富山さんのお父さんは日清印刷の支配人でその話を聞いたんですが、いきなり見知らぬ奴が入ってきて「スト！ストだ！」と叫んで、支配人がひと言も口を聞かないうちに、ストに入ってしまったということです。非常にむちゃくちゃな時代だったんです。しかし労働運動の余波は、私が昭和6年に秀英舎に戻った時にはほとんどありませんでしたが、やはり景気が悪く失業者が増えていくのが常態で、今のような状況とも違うので静かなものでした。

その当時、月給が20銭から25銭ぐらいで、昇給というと1銭や1銭5厘ぐらいなものでした。それが戦争になると急に何円になり、何十円になり、この頃では何千円ということになったようですが、その頃から見ると全く夢のような話です。

## (2) 覇 者 王 者

昭和6年はそんな様な時代でしたが、さっきの4社の合同というのはもっと後の時代のことです。これはまあケムのような話で、4社といっても資本構成が違ってまして、共同印刷は大橋家の個人資本で資本家的要素が強いし、日清印刷、秀英舎というのは株が細かく分かれていて、当時資本家と称するものがないんです。日清印刷は早稲田の系統の資本が多く入っていたとか、秀英舎は昔からの古いのが残っていたというようなことで、今日の資本主義的な資本家というのはいなかったんです。それから凸版印刷は井上さんが資本家的背景を持っておられた。というようなことで、会社の構成が違うので、時々集まって一緒になってやったら不景気だから値段は上がるだろうとかそういう話は出ましたが、さて会社を一緒にしようと言う話が出なかったんです。大体の傾向というのは、共同印刷と秀英舎つまり大橋さんと青木さんは割合に合い口で、井上さんはどっちかという攪乱政治家のほうで、当時はみな恐れをなしていたような状況で、井上さんと合併するというのなかなか考えられなかったようです。

これまた話が逸れますが、井上さんは私の中学の先輩だということで、大分お世話になった人ですが、初めのうちは、つまり私の秀英舎時代には、井上さんに対しては心服していなかったんです。井上さんは手腕家で凸版印刷をあそこまで伸ばしたんですが、覇者王者のやり口には無理があるだろうと思っていただけで、非常に面倒をかけたんですが、心服するところまでには至らなかったんです。

晩年、井上さんが山田さんに席を譲って、熱海へ清遊された前後から時々お伺いしまして話をしたんですが、井上さんは家庭生活ではこれ以上立派な方はいないというような人で、井上さんの家庭は模範的な家庭だったと思います。私は井上さんのご家庭に出入りするようになってから、井上さんの人格というものに非常に感心しまして、その後お隠れになるまで十数年ありましたが、その間いろいろお話を伺いました。非常に立派な方ですが、しかし事業なんかやるには少しは人に言われるほどやらなければ成功しないのかもしれませんが。私なんかもどっちかと言えば生存競争に弱い方なんですけど、現在どうか自分の好きな仕事をやっとりましますから、別に自分のやったことに後悔はしとりません。これはまあ先人の轍ということで、おやりになるのに色々なやり方があるという一つの指針になるんじゃないかと思います。

昭和の初めはそんな事でゴタゴタしていましたが、それから戦争になった。私は印刷界における大きな事件というか、大きな転機となったのは、戦争が激しくなったということです。その前に私は業界にあまり出なかつたんですが、転機となったのは印刷局の矢野先生の関係で業界に引っ張り出されたときです。矢野先生はお役所におられたんですが、青木さん始め、お役所の方の悪口を言うわけではありませんが、役所の方は民間のことをあまり構ってはくれなかった。「局」ということで悠然と構えていたんですが、矢野先生だけは非常に民間と接触され、印刷事典を出されたりしました。しかし戦争になって資材が少なくなり、資材の代用品を作ろうということ印刷局で計画したんですが、これは局だけではどうしようもないから民間に呼びかけよう、ということになったんです。私はその前に矢野先生を知っておりましたし、一番若くて使い易いということから引っ張り出されたのかもしれませんが、代用品研究会ということで技術屋さんを集めたんです。



### (3) 味噌と醤油と印刷

当時の感じを今でも忘れないんですが、技術屋さんというのは天狗が多いんですね。「これは自分のところだけしか出来ないんだ。俺だけしか知らないんだ」というのが多くて、それでなかなか他人に教えないんですね。今でもおそらくそういう感じはあると思うんですが、昔は特にそれがひどかったんです。ですが、各印刷所の技術屋さんを集めて話し合ってみると、大抵何処でもやっているんだね。そう変わったことはやっていないんですよ。

矢野先生を看板にして随分骨折ったんですが、戦争中に代用品を研究したことは十分な成功と言えないまでもある程度業界に役立ったと思います。そのうちに企業整備とかが始まり、出版会に出版文化協会というのが出来て軍の出入り機関のようになって羽振りが良かったんです。ご承知のように戦争時に軍から離れたら何も出来ないんで、大日本の常務をやっていて軍にあまり出入りしなかった事が一番まずい事じゃなかったかと思うんです。凸版印刷なんかは非常に軍に関係を持ったので大きな利益を得たと思いますし、共同印刷もある程度は関係していたでしょう。印刷機械の製造が禁止になりましたら、伸びるチャンスがなかったんですね、大日本は軍と密着していなかったから。このことは戦争後のことでもお判りでしょうけれど、アメリカ軍占領するとアメリカ軍にペコペコ頭を下げて、上手い人は上手い具合やり、毛唐の野郎が何だ、というような人は成功しておりませんからね。今考えてみますと、戦争中、軍に取り入った人は、戦後すぐアメリカ軍に転向するといった具合で、あれは一つの才能でしょうね。

それで、出版文化協会というのが出来て大層羽振りが良く、うらやましくなってひとつ我々も何か軍に関係しようということになった。印刷は初め通産省が関係官庁だったのが、そのうち味噌、醤油と一緒にされて、農林省の関係になりましたね。それで通産省なんかへ行っても全然相手にしてくれないので、出版文化協会のようなものを作ってやって行こうという事になったんです。

それまで業界の大きな勢力というのは大橋さん、井上さん、青木さん、それから鈴木正平さん（中屋三間印刷）というのが非常な世話役でした。それから印刷雑誌をやっていた郡山さんなど10馬力以上の会社の東京印刷工業組合がありました。これをどうやって一緒にもって行くかどうかというのが当時大問題だったわけです。ところが長年鈴木、郡山のコンビでやっていたのでマンネリズムの感じだったわけだね。それで我々のような者が飛び出したんだが、どんな奴か判らないところに興味があつたんだろうな。で、凸版印刷から山田さん、共同から大橋松雄さん、それから私の3人が一緒になったんです。ところが、また山田さんと郡山さんというのが合わないんだね。で郡山さんもやる気はあつたんでしょうけれども、「もう長いことやっているから駄目だ」ということで辞めたんです。それで役所なんかへもこの3人で行ってやりました。当時私は一番年上だし、中間派だったわけです。ところが山田君や凸版会社というのは、井上さんが朝5時に起きて長唄の稽古に行って、その足で会社行って飯を食うんだね。それで山田君以下皆は7時頃会社に出て



いる。そして夕方5時には帰ってしまう。ところが大橋さんは10時頃にならないと出てこない。その代り夜はいつまででもいい。そういうことで私は両方に引っ張られて、朝7時頃から夜10時頃まで働き回るといような事になったわけです。

まあ苦勞して印刷文化協会の結成に漕ぎ着けたわけです。印刷文化協会というのは大きい会社と小さい会社の団体が一緒にならなければ認可されないんですから、大きいところが威張っているわけにはいかないんです。

#### (4) 昇給要求書

出版のほうは政府のお声がかりで出来たんで大変都合が良かったんですが、こっちのほうは、自選ですからね。こっちからやいのやいの言わないことには軍では何もやってくれない。それと出版のほうは情報局が担当だったのが、印刷は通産省なんで、通産省というのは力が無くて駄目なんだな。で、やっているうちに起きた大事件は企業整備ということなんだね。これは今から考えると馬鹿らしい話なんだが、当時としては大問題だった。機械は本所深川のほうに放り出してあったり、活字は学校の庭に投げてあったりでね。しかし企業整備というのは印刷界としては成功したんでしょうね。あれだけのことをガタつかずにやったんだから。

さっき日清印刷と秀英舎の合併の裏話を、という声がありましたが、あれはあまり裏話がなかったですね。やっぱり当時は皆苦しかったものだから、一緒になったらいくらか楽だろうということで合併したようなものです。日清印刷というのは、秀英舎の青木さんの下にいた富山さんのお父さんがやっていたものだから、職工の構成などが似ていて、それで合併するのに都合が良かったんですね。結局は合併して良かったんでしょうな。

エピソードと言えば「家の光」という雑誌が良い仕事で、一生懸命とっていて、せっかく日清がやっているのをつついてはいけませんが、ところが杉山というガムシヤラな男がいて、鼻をあかすと言って一生懸命運動をやっているんだね。それであまり運動するなと言ったんだが、その理由は言えないんだな、どうせ合併するんだからということね。それで竹内喜太郎さんの所へ行こう言う訳だからと話したんですよ。ところがまたまた竹内さんはこんど「主婦の友」へ行って、昔の営業報告は明細を書いてあったから、それ



を見せて秀英舎はこの通り仕事は悪いし、悪いインキを使っていますと言ったんだね。そんな一幕もありましたよ。

4社の合併というのは噂だけで、大橋さんが合併には応じませんでしたね。個人資本ですからね。共同は戦後、機械を入れるのが遅れましたね。あれは株の公開をしなかったからで、増資が出来なかったのが原因ですね。

20年～21年頃、経営者連盟というのが出来て労働契約を行い、その後すぐ大日本、共同、凸版、東京証券がストを起こしたんですね。その後5社の労務担当者の会合が出来、昇給なども5社が材料などを持ち寄って、決定するようなこともありました。後には結局各社各自でやることになりましたが。

終戦後ストの前に昇給の要求書が出たんですね。倉田さんが筆頭でやっていますが、井上さんが私を呼びつけて、倉田以下こんなことをやっているが、要求とは何事だ、と私を怒鳴りつけるんですよ。そういう風潮になったんだからしょうがない、と言っても容認出来ないと頑固なんですよね。前はどうすると聞くもんだから、とにかく大きな波にまともにぶっかったら負けちゃうから、何とかかわさなければと言ったんです。そしたら、そんな弱い事で会社経営が出来るか、お前なんか会社に預けておけないときたんだね。怒ってましてね、それでも結局山田さんに任せきりになって自分は引込んでそれで嫌になったんじゃないですか。

## (5) 叩けよさらば

井上さんは陰で立派な事をやっていましたね。私も晩年までそういう事を知らなかったんだが、黙ってやっていたということは偉いね。今はもう亡くなったが、大蔵省の国税局にいた渡辺という人は、井上さんのお陰で学校を出てやっていたからね。井上さんのお巾の時に初めて知りましたがそういう事を人には黙ってやりましたね。

レッド・ページの時は大日本で48人捕まって、あれでようやく落ち着きましたね。あの時立ち入り禁止の門の所にカメラを据え置いて写真を撮したんだが、何枚か良いのが撮れたので警視庁へ持っていったんだね。そしたら電話がかかってきて、あれはまずいって言うんだね。警察官が押さえているところが写っているからとね。  
(別原稿) 私は6つの時に親父と別れていますから、思い出という



のは特別にない。親父は勝海舟のところで居候みたいことをしていて、それで秀英舎という名前も勝海舟がつけたんだな、英国に秀でるという意味でね。若い頃西郷隆盛はけしからんから殺してやる、というので勝海舟の紹介状をもらって鹿児島へ行ったのが最初だったんだね。それで紹介状というのは普通、封をしないのが礼儀だと言うんだが、その紹介状には封がしてあった。西郷隆盛のところへ行行って座敷に通されるとすぐ隆盛に、「おはんたちは俺を殺しに来たな」とやられたそうで、びっくりしてしまった。気合を抜かれて、懇々と諭されたそうだが、どうして殺しに来たことが判ったかと聞くと、紹介状にこの馬鹿者どもが殺しに行くから説教してやってくれ、とあったんだね。それで説諭されてしまって鹿児島に2、3年居たという事です。それから天草へ行き、北海道へ行き、素寒貧になって帰って来て秀英舎を始めたということです。

## 雑記

「私はこのほど、アメリカを旅行する機会があった。広大なる土地、豊なる地下資源、こうした好条件の下に置かれたということは勿論ではあるが、根本はこれら豊かな自然環境を駆使したアメリカ人の開拓精神にあると思う。アメリカを旅行して驚く事は、小は日常の生活品の数から、大は大工場の機械設備に至るまで、より便利、より能率的な製品の創造のための努力をひた向きにしていることである。この努力とこの熱意が、アメリカを推進させ、アメリカを繁栄させた原動力となっていると思うのである。

日本の印刷業界もここ数年長足の進歩を遂げ、製品も物によっては世界水準に達してきている。印刷製品の分野もIBMなどの計算機械の普及につれて新しい事務用印刷物が出てき、セロ・アルミ箔等のいわゆる特殊印刷物分野に拡がり、材木・スチールなどの印刷にまで入ってきた。こうした時代にあって、同友会諸君は、その研究分野の門口を深く掘り下げて大会社のマス狭め、さらにプロへの独自驀進の協道にあって特長ある、権威ある製品の境地を開拓することこそ、今後の道ではなかろうか。

それはたゆまざる努力と研究である。同友会の精神こそこの道にあると思う。会友諸君はそれぞれ一城の主となられ、相当の年輩となられた方もあろうが、精神はこの若さ、この熱をもって仕事に当たられたいと思う。

叩けよ、さらば開かれん「印刷同友会20年史」20年史に寄せる…より)